
セイムパズル

白河才人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セイムパズル

【Nコード】

N6203C

【作者名】

白河才人

【あらすじ】

差出人不明の封筒には、パズルゲームの紹介が書いてあった。パズルを解いた人々に届けられたのは……。パズルゲームから始まる最悪卑劣な悲劇の物語。

第一話（前書き）

こんばんは、白河才人です。

今作品が初投稿になります。

最後まで書き終えられるか心配なところですが、読者の皆さん（大勢いればイイナア）に面白いと感じてもらえる作品を提供したいと思っています。

さて、この「セイムパズル」ですが、某・超有名ゲームサイトのコンテンツとは関係ありません（苦笑）。

あのゲームを思い描いて読まれる方も出てくるかな？ってことで、ここでも断っておきます。

それでは、私のダークな世界へ足を運んでみてください・・・

第一話

三〇三号室の郵便受けには、一通の茶封筒が入っていた。
差出人の記述はない。

三〇三号室の借り主、矢崎拓巳やざきたくみは首を傾げながら封筒を手に部屋へと向かった。

矢崎は上着を脱ぎながら、パソコンの電源ボタンを押した。
いつも家に帰って来たら、真っ先にメールチェックするのが日課になっている。

ノートパソコンの画面が青白く光り、起動音が流れた。

矢崎はデスクの前に座ってパソコンが立ち上がるまでの間に、不審な封筒を開けた。

中身を確認すると、三枚のワープロ文書が出てきた。
パソコンは新着メールがあることを知らせていたが、矢崎はメールチェックを後回しにして三枚の用紙を手にとった。

『突然の連絡で申し訳御座いません。』

この度、矢崎拓巳様に一つのパズルをご紹介しますたくて連絡を差し上げました。

操作自体は至ってシンプルなスライドパズルです。

二十四のブロックを並び替えて一枚の絵にしてください。

制限時間は御座いませんが、他参加者一名との対戦型タイムトライアル制になっております。

パズルの開始後から時間をカウントし始めますので、速やかに絵柄を揃えてください。

なお、対戦者よりも早いタイムでパズルを完成させた場合、貴方様に馴染み深い特別な景品をご用意しております。

参加するもしないも貴方様次第ですが、参加しない場合は無条件

でペナルティが科せられることがありますのでご覚悟願います。
パズルの具体的な内容につきましては、同封の資料を参考してください。

貴方様のご参加を、スタッフ一同心よりお待ちしております。

有限会社 ジェミニ

一枚目の用紙をデスクに置いて、矢崎は他の用紙の内容を確認した。残りの用紙にはパズルが用意されているホームページの情報と、パズルの操作説明がそれぞれ記載されていた。

矢崎はキーボードを叩いて、用紙にあったホームページにアクセスしてみた。

昔懐かしいファミリーコンピュータ風のレトロなメロディーが流れた。

三枚目の用紙に書いてあった通り、マウスを動かしてスタートボタンを押した。

パズル画面に切り替わり、カウントダウンが始まった。

三、二、一、スタート。

ゲームセンターでよく聞く女性の声でゲームが始まる。

十五ブロックのスライドパズルは何度かやったことがあるが、二十四ブロックのものは初めてだった。

矢崎は一秒ずつ加算されるタイマーを気にしながら、まず一行完成させた。

段々とパズルゲーム以外のことは頭から消え、矢崎は熱中してきた。残り二ブロックなのに順番が逆になってしまい、一行分やり直しになったときは思わず声を発していた。

ようやくパズルを終えたとき、矢崎が帰ってきてから一時間が経過していた。

矢崎は思わず興奮してしまった自分に苦笑いした。

パズルゲームはエンディングロールを流していたが退屈なので、矢崎は途中で見るのをやめてメールチェックを行った。

新着メールは全て迷惑メールだった。

矢崎はパソコンの電源をつけたまま、鼻歌交じりで風呂場へと向かった。

パソコンの画面には“Y o u A r e W i n n e r ! ! ”と赤文字で表示されていたが、矢崎が風呂から出てきた頃にはパソコンの電源は消えて真っ黒な画面に戻っていた。

第二話

キンコーン、カーンコーン。

学校のチャイムと同じ旋律のメロディが流れ、スピーカーが十二時
を知らせた。

昼休みのチャイムだ。

席を立つ人の話し声で、フロアが急に騒がしくなる。

一方、片桐佳奈はもう少しで終わりそうな打ち込み作業に没頭して
いた。かたぎりかな

周囲の喧騒に合わせて、キーボードを叩く音も大きくなっていった。
昼休みが始まってから五分以上経過して、やっと作業が終わった。
両腕を前に伸ばして、佳奈は大きく深呼吸した。

「お疲れさーん！」

明るい声と共に両肩に手を乗せた人物を見上げて、佳奈も「お疲れ
さまー」と微笑んだ。

見上げた先で、大隈香織おおすみかおりが笑っていた。

「待たせちゃってゴメンネ。お昼どこ行く？」

「どこでもいいかな。佳奈は？」

「私は何でもいいよ。どこも混んできちゃったと思うし」

「そっか。うーん、じゃあね、強いて言えば寿司が食べたいっ！脂
の乗った大トロとか！」

無邪気な笑顔の香織の頭に、空のペットボトルが飛んできた。

「もちろん却下」

「キヤー！もう、冗談に決まってるって」

香織の背後には、仲村めぐみなかむらがペットボトルを握って立っていた。

「いや、底なしの食欲が冗談なんて言わないでしょ」

「誰のことかな？こんな小食でスレンダーな女の子を捕まえて、メ

グミーは何を言ってるのかしら」

「スレンダー？それは佳奈よね。まさか香織自身のことは言っていないでしょ？」

「あらあら、メガネの度が合っていないんじゃないのかなー、この人は」

「メガネはつい先週変えたばかりだから、体系までバッチリ、クツキリ、よく見えるわよ？」

冗談半分の口喧嘩が段々とヒートアップしてきて、香織とめぐみの笑顔が引きつっていた。

「まあまあ、二人ともー。それより早くお昼行こう？」

毎度のことだが、佳奈は慌てて仲裁に入った。

二人ともゆっくりと佳奈の方に顔を向けたが、その表情はまだ引きつっており、背後に龍と虎の幻影が見えた。

「君たち、まだお昼に行ってなかったのか」

会議室のドアが空いて、矢崎課長が出てきた。

香織とめぐみは何事もなかったかのように、背筋をピンと伸ばして平静を装っていた。

それがまた佳奈にとっては可笑しかった。

「弁当でも買って食おうかと思ってたんだが、よかつたら一緒に食べに行かないか？」

香織のまぶたがピクンと反応したのを佳奈は見逃さなかった。

「ぜひぜひ、ご一緒させてください。ちなみにどこへ連れていてくれますか？」

“連れていって”の部分強調した言い回しで、香織がいち早く返事をした。

「ファミレス、中華、定食、ラーメン・・・安いお店はもうどこもいっぱいかもしれませんね」

めぐみが香織に追従した。

普段はいがみ合ってるのに、こういつときのコンビネーションは抜

群だ。

矢崎も苦笑いしていた。

「じゃあ、駅前の回転寿司にでも行くか」

「支払いはもちろん？」

「はいはい、僕が奢るよ」

「じゃあ、さんせーです！」

「よっ、次期部長！太っ腹！」

香織とめぐみは声をそろえてはしゃいだ。

「片桐君もそれでいいかい？」

「は、はい！それでいいです」

急に聞かれると思っていなかった佳奈は、裏返った声で答えた。

「さあ課長、行きましょ行きましょ！ほら、佳奈も急がないと置いていっちゃうぞー」

「あ、今行く！待って！」

佳奈はバッグを手にとつて、小走りで三人の後を追いかけた。

大通り沿いにある回転寿司屋はファミリー向けの安価な店ではなく、新鮮なネタを売りにしている値段も少し高めの店だ。

もちろん佳奈が店内に入るのは初めてで、その厳かな雰囲気恐縮していた。

四人は回転台脇のボックス席へと案内された。

香織とめぐみが争うようにベルトコンベア付近の席に座つたので、佳奈と矢崎はその二人に皿を取ってもらつて食べ始めた。

食事中は香織とめぐみの話が大半を占めていた。

香織の食べ歩きについてや、めぐみの株式投資についてなど、いつもと変わらない笑い話だった。

佳奈は二人の話を聞いて笑っていた。

「ところで矢崎課長は最近ハマったことって、何かありますか？」
言つた後、めぐみはイクラの軍艦を一口で頬張った。

「ハマったことか。趣味という趣味も、最近ないしな・・・」

矢崎はお茶を啜った。

「そういえばこの前、パズルを解いたな」

「パズル？ジグソーパズルとかですか？」

香織が中トロを口に入れたまま聞いた。

「いや、スライドパズルって言ったかな。五×五のマスに入った二十四のブロックを動かして絵柄をそろえるタイプの」

三人は矢崎の話に聞き入った。

「僕のマンションのポストに、差出人のない奇妙な茶封筒があつてね。初めは何だろうかと思つたが、単なるパズルサイトの宣伝だったみたいでさ。中の用紙に書いてあつたホームページを開いてみて面白そうなパズルゲームだったんでやってみたんだ。僕はこういうの得意じゃなかったから、結構時間が掛かってしまったけれど。君たちなら十五分くらいで解いちゃうんだろうね。興味があつたらやつてみるかい？」

矢崎はカバンのクリアケースから茶色い封筒を取り出して、中からパズルのホームページが載つた紙を広げた。

「ちなみに矢崎課長は何分くらいで解いたんですか？」

「正確な時間は忘れたけど、一時間くらいじゃなかったかな」

「じゃあ若手の意地として、矢崎課長のタイムには負けてられないですね！」

「大隈君、それはひどいなー」

笑い声が交錯する中、佳奈は封筒の中に残つていたもう一枚の用紙を広げた。

読んでいくうちに、途中の脅迫めいた文章に段々と怖くなつていった。

佳奈の表情に気付いたのか、めぐみが声を掛けた。

「どうしたの？佳奈、具合悪いの？」

「大丈夫。それより、これ見て欲しいんだけど」

佳奈は隣に座っていたためぐみに用紙を見せた。

矢崎がその紙を覗き込んで、静かに取り上げた。

「これね一緒に封筒に同封してあったけどさ、景品なんて何もなかったよ。ホームページにアクセスさせるための、甘い誘惑と単なる脅し文句だったってわけさ」

「でも・・・」

「佳奈、何もあんたが怖がることないじゃない。矢崎課長だって気にしていないんだから」

めぐみに頭をなでられて、佳奈はうつむいた。

「まあ、佳奈がやらないって言うならアタシもやらないでいいかな。矢崎課長に何かあっても巻き添えはイヤですから」

香織が冗談半分で矢崎をからかった。

矢崎は怒る気配も見せず、笑って茶封筒をカバンにしまった。

「さて、今日で一週間も終わりだし、午後も仕事に励むように！」

矢崎が立ち上がったのと同時に、三人も立ち上がった。

「ごちそうさまでーす！」

佳奈は頭の中に浮かんだ不安を取り払うように、笑顔を作ってお辞儀をした。

第三話

「どう？仕事終わった？」

帰り支度を済ませたためぐみが佳奈の横に立った。

「あともう少しでキリがいいとこだよ」

「何分くらいで終わりそう？」

めぐみがワークデスクに手をついて、パソコンの画面を覗き込んできた。

佳奈は苦笑いした。

「・・・一時間くらいかな？」

小声になった。

「だね。あと一時間以上は掛かりそうな量に見える」

画面を見たままだったためぐみが、急に振り向いた。

「じゃあすぐ帰ろうか」

「帰れなくてごめん・・・え？」

きよんとしてる佳奈を尻目に、めぐみは佳奈のノートを畳んだ。

「ほらほら、早く片付けて！華の金曜日に残業してるなんて、佳奈だって嫌でしょ？」

「うん、それはね。避けられるなら避けたいよ」

「この作業って今日中に終わらせなきゃならないものじゃないでしょ」

「でも、早めに終わらせたいし・・・」

「今日期限じゃないんでしょ？」

「う、うん」

「よし！じゃあ残りは月曜に回して、さっさと帰ろうね！」

めぐみの矢継ぎ早な物言いに、佳奈が勝てるわけもなかった。

めぐみの言うとおり月曜日でもいいかなと、佳奈は作業途中のデータを保存して、パソコンの電源を切った。

「さーて、片桐少佐。毎週恒例、楽しい楽しい同期飲みにさっさと

行きましょう！」

軍隊の上官気取りで、めぐみはメガネの縁を指先で上げた。

「了解です、めぐみ隊長っ！」

佳奈はお遊びの敬礼を返した。

だが、その拍子にペン立てを倒してしまった。

蛍光ペンとボールペンが床に散乱した。佳奈は丸い目をさらに丸くした。

「はいはい、素早く片付けて、素早く行きましょ」

もう慣れたといった感じで、めぐみはしゃがんでペンを拾い始めた。

佳奈は照れ隠しの笑みを浮かべて、一緒にペンを拾った。

「めぐみ、いつもありがとね」

「そうね。感謝なさい？」

二人は笑った。

ステンドグラスのアーチをくぐって、中世ヨーロッパ風の店内に入った。

佳奈は音楽に詳しくないため、店内に流れている曲のジャンルも分からなかったが、ゆったりしたテンポのメロディーは佳奈の心を落ち着かせた。

「二人とも遅ーい！」

香織が手を振って、佳奈とめぐみを呼び寄せた。

他の部署の同期数人と一緒に、香織も既に出来上がってるようだった。

「ごめんね、香織。みんなお待たせー」

「誰かさんは待たずに、酔っ払いと化してるみたいだね」

「メグミー、それはまさか私のことかなー？」

「あら、香織こそ自覚あり？」

香織とめぐみのやり取りに、他の同期メンバーは笑って騒いだ。

「さて、みんな揃ったことだし、乾杯しますか！」

毎回幹事役を引き受けてくれる、山村大樹やまむらいたいきがウイスキーグラスを持

った。

「二人とも一杯目はいつもので構わないよね？」

カルーアミルクとブラッディマリーが、佳奈とめぐみの前に差し出された。

「わあ、ありがとう」

「あれ、いつもの・・・？まあいいわ、ありがとう」

めぐみはニヤニヤしている香織を尻目に“血まみれの女王”を手に持った。

「それじゃ、カンバーイ！」

「カンパイ！」

グラスのぶつかり合う音が重なった。

「矢崎課長って絶対、佳奈のこと意識してるよね」

一時間ほどして、テーブルは恋愛の話に移っていた。

「そういえば今日も『片桐君もそれでいいかい？』って気にしてた！気遣いのできる男ってかっこいいよね」

香織が話を大きくする。

佳奈はウーロン茶のストローに息を吹き込んで黙っていた。

「うちの部でも矢崎課長は人気だよ。若くて独身で、エリートコースまっしぐら！その上、女性に紳士的だし」

「でもそっかー、矢崎さんは佳奈に気があるのね。ショックだー」
ウーロン茶の泡が次第に大きくなる。

白ワインの入ったグラスを一気に空けて、めぐみがポツリと、しかし皆に聞こえる声で言った。

「香織も矢崎課長好きだったよね」

「メグミー！」

酔った顔をさらに真っ赤にして、香織は立ち上がった。

佳奈も息を飲んだ。

「香織、矢崎課長狙ってたんだ？」

「なんだ、チャンスじゃない！今度、デートに誘っちゃえよ」

「へー、そうなんだ？香織、矢崎課長のどこが好き？」

初めは驚いたが、佳奈も話の輪に加わった。

「佳奈まで！どこがっていうか、その前にいつ私が好きって言ったの！」

「いつも見てれば分かるわよ。あんた、矢崎課長の前では、目を輝かせて張り切ってるじゃない？」

「そんなこと、ミグミーに分かるわけないでしょ！」

「そうかもね。でも、これだけ当惑する香織の姿を見たら確信したわ。あんたは矢崎課長に恋してるのよ！」

めぐみは香織を指差して断言した。

香織は両手で顔を隠して、ペタンと椅子に寄りかかった。

一瞬、場の空気が静まり返り、皆が香織に注目した。

「そうね、私は課長が好きだわ」

香織がつぶやいた。

「矢崎課長の下で働くって決まったときから、一目ぼれしたんだろうね。優しい目で、私のことをちゃんと見てくれてるんだって思ったら、胸がドキドキしたもん。でも私やかましいし、子供っぽいからさ、あんな大人な人と釣り合い取れるわけないし。ずっとこのままでもいいって思ってるから・・・」

「ダメだよ！」

佳奈は自分の声の大きさにビックリした。

しかし、言葉を続けた。

「好きだったら、ちゃんと伝えたなきゃ。言わないままじゃ、どっちも報われないよ」

言った先から、佳奈も酔いが回ってきて、背もたれに寄りかかった。元々、お酒に強い方ではないのに最初から飛ばしすぎたのだ。

今はウィロン茶で酔いを冷ましているが、まだ頭が痛い。

香織は腕組みをして唸っていた。

「でも、矢崎課長は佳奈のことが好きかもしれないんだよ？いいの？」

「香織には悪いけど、私は課長のこと特別な感情持つて見たことないから」

佳奈は笑って見せた。

その表情を見て、香織はため息をついて笑った。

「何で私に悪いのよ。佳奈に後押しされたら、突っ走るしかないじゃない？」

皆が一斉に盛り上がった。

香織コールが店中に響き渡った。

佳奈の座ってる椅子に、香織も座ってきた。

「香織、頑張つてね！」

佳奈は両手を握って、香織に見せた。

香織は佳奈に抱きついた。

「言われなくても、当たって砕けてくるよ！」

香織の笑い声が耳元で聞こえた。

佳奈は振り返ってめぐみを見た。

誰よりもめぐみが嬉しそうな顔をしていた。

「香織、砕けるのは余計だよ」

今夜、一番の笑い声が響き渡った。

その笑い声の中、ふと茶封筒のことが佳奈の頭をよぎった。

しかし佳奈はすぐにその不安を掻き消し、ウーロン茶で再度乾杯した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6203c/>

セイムパズル

2010年10月22日12時03分発行